

赤いドアの向こう。そこでは、赤いシャツを着た男が、石像のようになってうずくまり続けていたはずだった。

今、その男アカイは、興奮して動き回る虫のように、せかせかと筆筒の中を漁っていた。

彼は、一枚の大きな赤いシャツを取り出すやいなや、着ていた服を脱ぎ、新しいTシャツに着替えた。棚の奥にあったそのシャツは、アカイの肌を冷たく刺激した。終始、アカイの目は見開き、瞳孔はすばまっていた。アカイは動きながら、何か喋ってもいた。

「俺は逃げなくちゃならない。俺は逃げなくちゃならない」

アカイは部屋の中を見渡した。部屋の中央でふんぞり返るソファ。その向かいで大の字に広がるベッド。彼らの下には、大きく口を開ける真紅のカーペットがある。

アカイはそれらから目を背け、台所へ向かった。

台所には、ワイン色をした小柄な冷蔵庫がある。アカイは、じっとその前に突っ立っていたが、やがて意を決し、戸を開けた。

中には、いく本かのジュース、水、開けかけの冷凍食品。そして、半分残されたハンバーガーがある。

アカイは、ハンバーガーを手にして、おもむろに食事をしはじめた。朝食？ 夕食？ そんなことはわからない。時間など、もうとっくにアカイの生活から逃げていた。

一口食べて、飲みこみ、アカイは食事を終わりにした。彼は、残りをまた冷蔵庫へ戻すと、そこで膝を抱えて座り込んだ。

じつと、曲線を描く冷蔵庫の戸を眺める。

隣の部屋から、人の話し声が聞こえる。時折、笑い声も。テレビの音声だろうか、アカイは思う。

(それかもしくは、友人かなんかを呼んでいるのかもしれない)

友人という言葉が浮かんで、アカイの眉はわずかに動いた。

アカイには、これといった友人はいなかった。交友関係など煩わしい。誕生日を祝ったり、飲み会に行ったり、気の効いた会話やジョークでしか、一関係を続けてもいい権利」を得られないなんて。アカイは、それらのことに関しては、まったくの無関心だった。

アカイの好きなことと言えば、テレビゲームだった。画面の中の世界。その中では、自分は自分のペースで進むことができる。現実にいるような、不当な干渉をしたりする者は存在せず、ゲーム内のルールに従って、すべてが回る。それは、アカイにとって素晴らしく快適な世界であった。

けれども、朝起きたときに見る世界はその場所ではない。四角く囲われた部屋。自分の色に染まった、自分の部屋。驚きも感動もない部屋。自分は赤いシャツを着ていて、赤いズボンを履いている。髪は汚れて体は青白く、無人の空間と、常に向き合っている。

やがて無人の空間は、自分を反射しはじめる。高慢な家具たち。締め付ける服たち。自分で揃えたものたちが、一斉に反逆をはじめ。俺は強い！俺はでかい！俺はすばしっこい！俺は賢い！

赤たちが迫ってくる。アカイを押しつぶそうと、やってくる。強くしてくれるはずの赤たちは、無自覚にアカイを追い詰めてゆく。

アカイは、襟を引き延ばし、息を吸う。

「……逃げなくちゃいけない。逃げなくちゃいけない」

大きすぎるシャツは、アカイの肌と布に必要以上の隙間をつくった。アカイはそれを押しつぶすがごとく、身を丸めてうずくまった。

アカイは、冷蔵庫の戸を見つめながら、あることを思い出していた。それは、あの黒が来たときのことだった。

黒はその日、アカイのドアの前で言った。

「いい紅茶が手に入ったんです。ですが、余ってしまった。お隣であるアカイさんに、お一つ差し上げようと伺ったんですが」

アカイは、彼の訪問をはじめて受けたので、何も知らずに、他の場合と同じように、彼に対してドアを開けた。

黒は部屋に入ってくるなり、くるりと一周、見渡した。

「あなたは、この色が好きで？」黒は訊ねた。

アカイは頭を掻き、さっと骨ばった手をあたりに振って言った。

「まあな。いい色だろ？」

黒は、その目に好意の色を浮かべなかった。ただ、入ってきたときと同様、平静な目つきをしていた。

「私には、そう見えません」黒は、ベッドやソファを眺めたあと、アカイに目を戻した。「なぜこんなにも赤を？」

「……赤が、好きだからさ。似合っているしな」

「そうですか」

黒はそう言って、紅茶の缶を置いていくと、さっさと去っていった。

アカイは、その後なぜか、膝をがつくり折って、カーペットに突っ伏した。自分でも説明ができない。だが、どこかで自分が壊されたような気がしたのだった。

黒が笑わなかったせいだろうか。いや、違う。黒がすぐ去ったせいだろうか。

いいや、それでもない。

黒は、一言も言わなかったのだ。アカイと赤に対して、承認の言葉を。そしてそれは、アカイの中で疑問を唱える存在と合致してしまったのだった。

（赤は、本当にお前の色だろうか？）

そいつは、その日から声を大にしてアカイに言いはじめた。

（赤は本当にお前の色だろうか？ 赤は本当にお前の色だろうか？）

アカイはそれらに蓋をする。その考えを打ち消す考えを作り上げる。やがて二つはどろどろと交じり合い、気持ちの悪いスープを完成させる。

冷蔵庫の前のアカイは思わず床に突っ伏し、空嘔で苦しんだ。スープの感情は波うち、強まり、アカイを揺すぶる。

このスープからは、速く逃げ出さなくてはならない。アカイは、部屋のドアに目を向けた。

（外に出るのか、アカイ？）

アカイの頭に、そんな問いが浮かび上がる。

つまるところ、俺は何者でもなかったのかもしれない。朦朧とした意識の中で、アカイは思う。

俺は、たしかに、赤を集めた。赤で身を固めた。身を固めた自分を、俺だと信じた。でも結局、俺には似合っていないかったというのだ。間違った大きさのものを、まとっていたというのだ。

アカイは、ドアを睨みつける。縦に伸びる、四角いドア。その向こうからやって来た者のことを思い出す。アカイの顔に嫌悪が浮かぶ。

スープから逃げるためにここを出たとして、次に何が起ころう？

アカイは、考えに考えた。

きつと、徘徊している黒にいずれ会うだろう。あいつに会うことと、この部屋に居続けること。どっちがより危険だろうか？

……だが、そこで、とある答えを見つけたアカイは、額を伏せ、静かにほくそ笑んだ。

なんだ。もしかしたら、非常に簡単なことなのかもしれない。

アカイは黙って、座り続けた。

空白のキャンバス。その前で、体を二つに折ってうずくまる姿がある。彼女の頬は引きつり、喉の奥でなにやら呻いていた。

彼女、アオの手には、筆が握られていた。けれども、それは描画のために動いてはいなかった。筆は、硬く握られたまま、アオの様子を無表情に見つめている………。

しばらくすれば、アオは元通りになるのだった。あの、創造の海を駆け巡る、自由な風をまとった少女に。彼女は息をついて立ち上がり、何も描かれていない真っ白なキャンバスと向かい合うのだった。左にパレット、右に絵筆を持ち、彼女はもう一度息をつく。

アオは、大人しく色と色の組み合わせを考え、絵の具を混ぜはじめた。そんな彼女の顔には、見えない傷があった。辛勞の傷が、深々と。

アオは知っている。自分が、何もかもを置いてきてしまったことを。大事なものの、見捨ててはならないもの、それを彼女は置いてきてしまった。あまりにも恐ろしいがゆえに、彼女は置いてきてしまった。

アオは、一本の線を引いた。揺れながら、けれど線は、たしかに一つの形を生み出そうとする。

ここに来た当初は、平穏な時間を過ごしてきた。今まで夢見ていた、色と向き合える場所を、ようやく手にすることができたと思って。

だが、孤独とは危険だ。常に考えが内側で渦巻き、別の形になって、思いがけず牙となり、己を咀嚼しはじめ。過ぎたものを、わざわざ持ち出してくる。

アオは再び目をつむった。あの日のことを思い出す。どうしても、あの日ばかりは忘れることができない。

あいつがやって来た日。あいつが私と向かい合った日。

あいつの顔を思い出した途端、アオの筆は鋭くキャンバスを横切った。牙がアオを貪り食った。現れる暴力的な筆跡。

アオは荒い息をついた。その息の音を聞きながら、目の前の傷跡を見つめた。置いてきて、忘れ去ろうとしたはずなのに。あいつはいつもやって来る。アオは、その黴ごっこから、いつまでも抜け出せないでいた。

卵色の布団にくるまりながら、美しい髪に顔をうずめるキイロは、天井の隅を眺めていた。テレビの光が、冷たく不規則に反射している。何が映っているのか、キイロは知ろうとしなかった。彼女はもう、情報を見ていなかった。ただじっと、部屋の内側を眺めていた。

テレビの話し声と混ざるポップミュージック。知らぬ間に、曲は次々と変わってゆく。まるで、途切れなくやってくる地下鉄と同じように。どの音の旋律も、キイロの心に届くことなく、表面をかすめていく。

キイロは毛布を首元まで上げ、身じろぎをして丸くなった。目は、まだ天井の

隅を見つめていた。

(誰が、あたしをこんなふうにしたのかしら)

キイロの中で、誰かが問う。キイロの視界に、潤いで光る金色の髪が入る。キイロは、無意識にその毛先に触れた。柔らかく、弾力があって、なめらかな髪。

大丈夫。手放しはしないわ。

布団の中で、キイロは唱える。じわじわとやって来る否定の声には、耳を貸さない。

この髪は、たしかに自分のものだ。自分が金を払い、大切に、綺麗にしてきた髪だ。爪も、肌も、今の自分は何もかもそう。なのに、どうして認めないの？ どうして「違う」と罵るの？ 自分のものになったんだから、自分のものに決まってるじゃない。

キイロは髪をまとめ、片方の肩に流した。そして毛布を押しつけ、何か飲むようにベッドを立った。

白湯をマグカップに入れ、口に含みながら、キイロは再びベッドへ戻ろうとした。そこで、キイロはふと、鏡に映る自分の全身像を見た。

焦心しきった、髪の長い女。黄金色の毛髪は、包み込むようにキイロを支配している。指先に宿る、マニキュアの青い光。その光輝は、乱れた寝巻と、互いに攻撃し合っている。

何もかもが、似合っていない。キイロの中で、それぞれがそれぞれの主張を繰り返している。キイロは、その鏡の中に、疲れ切ったゴールドの姿を見た。

そう、自分はまるでゴールド。本当に瓜二つ。彼女を追いかけ、彼女になったんだから、当然だ。そして、かつてのキイロの姿はどこにもなかった。貶され、認められなかった野暮なキイロは、その鏡の中に存在しなかった。

鏡の向こうのキイロの頬に、一つの光がこぼれ落ちた。

「あんた、誰なの？」

鏡の中のキイロが訊ねてくる。「あたしはどこにいったの？」

「知らない人よ」キイロは言う。「あたしはもう、どこにもいないわ。いいんでしょ？ これで。あたしが望んできたことなんだから、いいことなんですよ？」

だが、鏡のキイロは、二つ三つ、雫を流すのだった。

キイロは、自分の中の何かが、ぶちぶちと切れていく音を聞いた。切り口は、二度と元に戻らないように思えた。結つても、溶接しても、どんな方法でも元には戻らない。欠片たちは、ばらばらと離れ、散って、消えてゆく。

あたしは、何を間違えたというのかしら？

キイロは立ち尽くす。

あたしは、いったい誰だというの？

そこで最後の一本が切れた。キイロは、ベッドへと倒れ込んだ。

部屋の外。広場の中央。そこで一人、佇む影があった。

黒だ。

黒は、じきに歩き出す。誰のドアを叩くのか、彼は考えあぐねているようだった。彼は、部屋のドアを一つずつ眺めてゆく。

ゴンゴンゴンゴン、と、鈍く堅い音を立てているのは、緑の部屋だった。

緑は、右手に金槌、左手に太めのプラスチックドライバーを持って、壁に穴をあけようとしていた。

壁を破壊することを決めた緑は、眠りから覚めたあと、全身に震えるような興奮が駆け巡っているのを感じた。緑は、その興奮に押されるがまま、道具を見つけて出して、壁と向き合った。もう壁からは、忌々しい力を感じなかった。この先に起こる変化を思えば、緑は、壁を破壊したくてたまらなくなった。

ドライバーの先端を当て、柄に金槌を打ちつける。コンコンコンコン。ゴンゴンゴンゴン。

はじめはおっかなびっくりで行った作業だったが、進めるにつれ、緑は気分がよくなり、すぐに小指の先ほどの穴を開けていった。その穴を足掛かりに、緑は穴を広げていくつもりだった。

緑は、この計画が成功した場面を思い描いた。自分の頭くらいの穴ができればいいな。向こう側には何が見えるだろう。いいや、ただ見るだけじゃもったいない。いつそのこと、ここから出てしまうのはどうだろうか！ ドアからではなく、自分で開けた穴から出るのだ。緑は思わず笑みをこぼした。これは、かなり面白い計画だぞ。馬鹿げて、奇想天外なことをする。これが緑の長年の夢だったのだ。緑は、計画を成功させようと、俄然やる気が出てきた。

途中まで、緑は、身を躍らせて作業を進めていた。そして、綿のような断熱材にドライバーが突き刺さったとき、突然胃を引っ搔かれたかのような緊張が走った。緑の手は、ぴたりと止まった。

黒々と開いた、親指大の穴。

緑は、あまりのことに恐れおののき、一步、二歩と、壁から退いた。

何もなかったはずの、苔色の壁。そこには、目のように空虚な穴が一つ、あい

ている。不格好な黒い穴。痛々しい傷跡。これを誰かが見たら、なんと言うだろう。

壁に穴をあけただど!! どうかしてる! 君は何がやりたかったんだ? こういうやつは、この部屋に住んでちやだめだろう!

(いや、でも僕は外を見たかっただけなんだ)

何を言ってるんだ?

窓やドアを開ければいい話じゃないか。

(違う、僕は僕なりのやり方で……)

僕なりのやり方? ただ壊したただけだろう。責任をどうとるつもりだ?

君、かなり馬鹿なんじゃないか?

ああそうだ。君はかなり馬鹿だ。

緑の額に、冷や汗が噴き出しはじめた。こんなことをしたって、意味がない。そうだ、愚かにもほどがある。壁に穴をあけるだなんて。このままでは、ここに住めなくなってしまう。

緑は、後悔の渦に飲みこまれた。窒息死するかと思うほど、息がうまく吸えない。僕、なんてことしちゃったんだろう。叱られるぞ、叱られるぞ、誰かに見られたら叱られる!

緑は、今度は壁の穴を修復するためにどんな方法があるか、その思案に時間を割いた。

誰かが戸を叩く音で、シラは、考え事の世界から現実へと引き戻された。

「誰だ？」

シラは階段を降り、ドアを開けた。

だが、そこに立っていた者に、シラは息をのんだ。

立っていたのは、黒だった。黒い背広に、黒い髪。その髪は後ろにぴったりと流され、一寸の隙も認めない。彼の片手には、黒い鞆が握られていた。

彼は、背の高いシラとぴったり同じ目線で、シラのことを見つめた。シラはたじろいだ。

「こんな時間に、何の用です？」シラは硬い声で訊ねた。とてもじゃないが、顔をまともに見ることができない。彼の存在は、非常に悍ましいものだった。

黒は、表情一つ変えず言った。

「もうじき、お隣さんの部屋にお客さんがみえます。そのとき、あなたはこの部屋をどうするか決断しなくてはなりません。そのための身支度を済ませておいたほうがよいと、進言しにまいりました」

「何を言っているんだ。私はこのまま住み続けますよ。お隣さんって、絵を描くあのアオでしょう。あの子の部屋にお客が来ただけで、なぜ私は決断しなくてはならないんです？ 理にかなっていない」

「私は、あなたに言いに来たまでです」

「そう、ご親切にどうも」

シラはドアを閉めようとした。だが、黒の手がそれを遮った。

「まだ何か？」シラは半分怒り、半分恐ろしきで言った。

「あなたは、自分自身に誇りがあるようですが、これからどうするつもりなんですっ？」

「何？ ……どうするとはどういうことだ？」

「誰かの誇りや自信は、人を動かします。いいようにも、悪いようにも。だが、

あなたは不安を抱きつつある。あなたは本をお書きだが、その中で自分の行方を探っているではありませんか？ 今の成功の先には、墜落しかないように思えるから」

「……意味がわからない。いいからさっさと帰ってください」

ぐつとドアを引いたが、黒はまだ掴んでいた。

「あなたはまだ知らない。自分がなんであるか。それについて、彼らと再び話さなければ、あなたはここに居続けることになります」

「彼ら？ 何の話だ。私はシラだ。シラでしかない。そのどこが間違っているというのか！」

「あなたは気付いていない。どちらの性も持たない、または持つあなたは、シラでしかない。それを見つけたことはとても素晴らしいことですが、それを知って、あなたは次に、どこへ行くのか？ あなたはまだ、歩いてもない。ここでじつくり、静寂に閉じこもっているだけだ」

「ほっといてくれ！」

ばんっ！ シラはドアを閉ざした。上下についている鍵を両方閉める。そうしてシラは、ずるずるとそこに座り込んだ。手も足も震えている。だが、シラはすぐ立ち上がった。

こんなことをしている場合ではない。シラは、コーヒーを淹れにいった。足を引きずり、台所一点を見つめ、亡霊のようになりながら、コーヒーのために進んでいく。落ち着こう。落ち着いて、彼が来たことなど忘れるんだ。そうすれば、さざ波のない、穏やかな時間がまた来る……………。

だが、シラはわかっていた。黒の言ったことは、真実なのだ。

尿意を感じて、チャヤはまどろみから目覚めた。重い腰を上げ、言うことを聞かない体に鞭打ち、やっとの思いで便所に向かう。

用を済ますと、チャヤはカーディガンを掻き合わせながら、お茶を入れるため湯を沸かした。傍の窓から、外を見やる。灰色一色。曇り空。チャヤは身震いした。

火にかけたやかんの口から、ほ、ほ、つと、湯気が現れる。チャヤは、かさついた皺だらけの手を当てた。冷えた手は、徐々にあたたまってゆく。彼は、今は何時だろうかと、時計に目を向けた。

時計は、秒針を硬く動かしながら、五時二十二分を指している。さて、それは朝の五時なのか、それとも夕方の五時なのか……。

チャヤは首を振った。どうせ、朝であろうと夜であろうと関係ない。やることはあまり変わらないのだから。

湯が沸き、やかんは叫び声を上げる。チャヤは、湯をマグカップに注いだ。戸棚から、しおれたティーパックを取り出す。色のない湯に、無造作に漬ける。ここでは何も起きない。いいことなのか、悪いことなのか。チャヤは、そのどちらとも思わなかった。彼は起きる。食べる。寝る。トイレに行く。そしてまた寝る、起きる、トイレに行く。その繰り返しをする。それがいいことか悪いことかなんて、誰か判断できるだろうか？ 自然の摂理に従って生きている。自分は、必要最小限のその線からはみ出したりしない。つまらないが、引かれた線の上を黙って歩くのは、「考える」という煩わしい行為を避けることができる。

茶をすすりながら、チャヤはソファに戻って、リモコンを手を取った。テレビ

の音量をどんどん上げる。音量数値が五十になろうが六十になろうが構わない。聞こえないんだから、仕方がない。

テレビでは、ミスターパープルというまだ青い男が取り上げられ、盛んにもてはやされていた。

「たしか君は、他の局で『何をやろうが構ったことじゃない』とか言って、ちょっとした問題を起こしたとか。あの喧嘩はどう決着ついたの？ その爽やかな笑みで鎮火させたのかな？

いやいや。ちょっと待ってくれ。断言しておくが、喧嘩はしていないよ。あれは発信者と受け取り側に齟齬があったんだ。『誰が何をやろうが構わない』って僕が言ったのは、責任は自分自身にあるということと言いたかったんだよ。決して殺人を助長してはいない。整形についても、『親からもらった姿を大事にしなくてもいいのか』という意見もあったけど、僕はそういうことを言いたかったんじゃないんだ。

他の誰かの範囲と自分の範囲ってのは、重なっているようで実は違う。周りには様々な意見が転がっているが、どこに向かうのかは結局自分が決めるものであって、その後の責任や結果については、誰かがジャッジできるものじゃないんだ。それはその人の範囲なんだから、あれこれ言うのは息苦しいと僕は言いたかったんだよ。まあ、この騒ぎも僕の不注意な発言のせいで起こったんだけどね。そう、これは、僕の責任だ。

なるほどね。ミスターパープル、君は中身もイケメンなようだ。

(観客の歓声)

そんなことないよ。いや、どうも。ありがとう」

チャヤは、もつと音量を大きくした。人の笑い声が、色の褪せた部屋中に満ち溢れる。チャヤは、ソファの上でまどろみはじめた。瞼が重くてたまらない。眠気が脳の奥底からやってくる。どうあがいても止められない。

チャヤの目は、やがて閉じはじめる。どうせ、起きていたって特にやることはないのだ。だったら、この波に乗ってしまった方が楽ではないかね？

眠りに落ちる直前、チャヤは、一言、「くそっ」と頭の中で呟いた。クッションをあてがっている腰が痛いのだ。立っても座っても、この腰は常に痛い。まったく、老いというのは、体にわずかに現れた瞬間から、急速に自分自身を飲みこみはじめる。終わりをゆっくり告げ知らせる。チャヤは痛みに顔をしかめながら、石のように口を閉ざした。

彼の口の中にも、頭の中にも、もう言葉はあまり残っていないかった。色々言ったところで何になるというのだ？ ただ虚しいだけじゃないかね？

アオは、隣の部屋のテレビの音がやけにうるさくなったと感じた。あの、足音がやたら大きいお爺さんだわ。アオは気づく。彼、自覚症状がないから困ってし

まう。何をやっている人か知らないが、存在表明が著しいのはたしかだ。

アオは筆を持ち、絵の具をキャンバスに塗りたくった。コバルトブルー、ウルトラマリン、ターコイズ、エメラルド、そこに浮かぶ、黄色い太陽。半分躍起になって、彼女はどんどん色を重ねていく。たっぷり、重厚に。新たな色は下の色を隠し、上の色と混ざり合う。それが垂れて、また他の色と混じり合ったのち、また別の色が重ねられる。

色の壁は、アオを現実から切り離しはじめた。隣の音は遠ざかり、絵の具の匂いと色が、アオを満たした。

そう、これでいいのよ。

アオは、今まで以上に満ち足りた気分だった。過去はやって来ていない。これは素晴らしいことだった。集中すれば、自分ができる。そうだ、これこそ本来の自分の姿だ。アオは笑みを浮かべた。このままいけば、あいつは来ないですむだろう。すっかり忘れて、正しい自分になれるのだ。ようやく、ようやく。

彼女は壁を築き上げる。自らの手で生み出した、色の壁。それは、彼女自身を守る、堅牢な壁だった。これが描ければ、私は安全。私は自由。私の価値が生まれ、私自身が、新たに作り変わる。何度も、何度も。それを壊すことは、誰にもできない。……………きつと。

黒は、四角い鞆を手を下げ、目の前に並ぶドアたちを正視する。彼の周りをおアがぐるりと囲んでいる。様々な形の、いろんなドアが。

彼は、じっと眺めていく。ゆっくりゆっくり、ぐるぐると。彼はドアを見比べ、

ドアは彼を見つめる。

部屋のドアが叩かれ、緑は飛び上がった。持っていた接着剤を、より強く握りしめる。あの低い音、容赦ない叩き方。まさにそれは、黒に違いなかった。緑は、居留守を使いたかった。けれど、黒の方から「もう聞こえていました」と聞き、ショックを受けた。

「何がだい？」緑は、声の震えを押さえて訊ねた。

「破壊の音は、外まで聞こえていました。はつきりと」

「……何しに来たんだ？」

「ドアのところまで来てください、緑さん」

緑は、立ち上がるのが本当に嫌だったが、彼がなかなか去ろうとしないのが心配でわかったので、仕方なくドアへ向かった。

ドアスコープを覗くと、黒と、その後ろに並ぶドアたちが見えた。黒の顔がぐっと近づけられる。緑は、「ひっ！」と悲鳴を上げ、一歩退いた。

「破壊行為はどのような感じですか？ 緑さん」

「え、何が？ 何も？ すべて順調だよ」

緑は、腰に手を擦りつけた。黒は、じっとこちらを見つめてくる。

「君は本当のことを言っていない。君は直していたんじゃないんですか？ 穴をあけた壁。その修復を君は……」

「ちよ、ちよ、ちよ。もういい、黙ってくれ。気味が悪い。お前には関係ないだろう！」

緑は、接着剤をポケットに突っ込んだ。黒は、ドアスコップ越しにこちらを凝視した。

「緑さん、もうじきこのあたりに嵐が訪れます。そのとき君が何をどうするか、それによって、この部屋の運命も決まります。嵐は、とんでもないお客まで連れて来る」

「いいや、嵐なんか来ない。でたらめを言うな。いいから、さっさとここから離れてくれ。気持ち悪い」

黒はそこでわずかに目を伏せ、一瞬沈黙した。緑は、わずかに勝利の笑みを浮かべた。

だが、再び黒と目が合ったとき、緑は、鳥肌が立つほど情けない気持ちになった。

「緑さん。私は、破壊も修繕も、どちらも責めておりません。ただ、やるなら早くやった方がいいと思うのです。君の部屋は、壊れているようですから」

「は？ やめてくれよ。僕の部屋は……」

「ならば、ドアを開けてください、緑さん。今すぐに」

緑は、その言葉に恐怖した。だが、相手に悟られまいと、ごくりと唾を飲み、「あ、ああ、いいよ」と、ドアノブを回した。

だが、手の中のドアノブは、開扉の感触を伝えてこなかった。緑のこめかみから、嫌な汗が噴き出した。

「どうなってる?!」

「焦ることはないはずですよ。私はさっき言いました、君の部屋は壊れていると。緑は慌ててドアを叩いた。

「出してくれ! どうなってるんだ? いつから? いつから壊れてるんだ?!」

「君が、このドアから出ていくことは自分の望みでないと、思ったときから」

「そんな！ ドアが開かなくなれなんて思っていないよ！」

「だが、君の部屋は閉じてしまったのです。君が、誰かに邪魔される恐怖を感じたときに。君は、自分でドアノブを壊しましたね」

「何言ってるんだよ！ 自分で出られなくするわけないだろう」

「そうなのでしょいか。だとしたら、ここに落ちている螺子や金属パーツは、いったい何なのでしょう？」

緑の全身の毛がざわっと立った。後ろに落ちているドライバーには目を向けないようにする。

そう、黒が何を言おうが関係ない。これは僕の部屋で、僕自身がどうしようが勝手のはずだ。部屋を開けないようにした理由なんて、彼に教えてたまるもんか。彼には、何ごともなく帰ってもらおう。

「さあ、僕は知らないよ。もしかすると、お隣さんが落としたんじゃないかな？」

緑は笑った。だが、黒は目を逸らさなかった。黒は静止したまま、静かに言った。

「君は、何が目的なんですか？ 閉じこもることですか。それとも、出ることですか。それとも、破壊そのものですか」

緑はもう頭に来た。「どうだっていいだろう！ 僕は忙しいんだ。それじゃあ

ね！」緑はドアを殴りつけ、さっさと部屋の内側へ戻った。

だが、黒は容赦なかった。

「あなたがそれでいいと言うなら……、いいでしょう。ですが、覚えておいてください。嵐が来たときのあなたの芝居工作は、それほどうまくいかないと思いますよ」

「もういい、帰れ！」

緑は、しばらくの間、荒い自分の息の音を聞いていた。

以前と変わりない静寂が戻ってきたとき、緑はようやく緊張と解いた。どうやら、黒はもう行ったようだった。

緑は深く息をつき、穴の開いた壁と向き合った。床には、陳腐な緑色をした色紙が散らばっている。彼は、その一枚に手を伸ばし、ポケットから接着剤を取り出すと、紙に塗りつけた。

壁の穴を、優しく塞いでいく。

そう、これでいい。僕は痛々しい傷を作ってしまった。醜い傷を作ってしまった。荒々しい態度をとってしまった。

緑は、今まで恨めしく思っていた苔色の壁を、今度は慈しむような手つきで撫でた。傷は修繕された。まだ乾ききっていない接着剤が、冷たさを伝えてくる。緑は、誰にも知られないうちに破壊と修繕がなされたことに安堵した。ドアノブのことも、誰かが入ってくるんじゃないかとか、本当はあそこから出なければならぬんじゃないかとか、もうそういった問題に悩まされずにすむようになったのだ。窓の心配も、もうする必要はない。窓は常に、僕の味方だったのだ。安心安全で、暑い日差しも、寂しくて目も当てられない景色も、あの窓は必要最小限に留めてくれていたのだ。それなのに、自ら危険を冒そうとするなんて。そのことで誰かにどう思われるのか気にするなんて。恐れで縮こまることになるなんて。

僕はここにしよう。いろいろ考えるのは、もうやめた。

緑は、閉ざされた部屋で、治した傷を眺めた。

もし何かあったら、大声で助けを求めればいいこと。何かあったら、誰かが外から開けてくれるだろう。それまで僕は、ここでのんびりと過ごすんだ。

洗面台の前で、キイロは、鋏を手にして立っていた。彼女は、むくんだ自分の顔と睨み合っていたが、やがておもむろに髪を掴むと、そこに鋏を当て、ぎりぎり切りはじめた。

艶やかな黄金の髪は、さざめき笑うように、光を反射させる。まるでゴールドの笑い声のようだと、キイロは思う。ゴールドは心の底から楽しそうに、朗らかに笑う。

その笑う髪は、キイロの鋭い刃によって、身から切り取られ、落ちていった。洗面台に落ちた極上の髪は、いまだに笑い続けている。本当に、楽しそうに。

あたしから落ちたのに、この髪は変わらず輝き続けている。残念そうなそぶりも見せない。それが、キイロの気持ちを決定的にした。

あんたは、あたしのものじゃないわね。

キイロは、まるで憑りつかれたように、次々と髪を切り落としていった。

もつたいない！

どこかで踏ん切りのつかない自分が抵抗している。けれど、キイロの手は止められなかった。髪が一房落ちるごとに、彼女の中で、納得の感情が増えていった。

頭の左側を切り終えたとき、こんこん、とドアがノックされた。キイロは、だが、無視した。彼女は右側の髪に鋏を入れ、着実に切っていた。

また、ノック。音楽に負けず、今度は少し大きめだった。キイロは、それでも切り続けた。

彼女は、洗面所の棚から除光液を取り出し、それで青い爪を拭いはじめた。彼女の動きは、野性的だった。粗暴で、丁寧さはどこにもない。けれど、キイロは

続けるのだった。本来の自分なら、やりそうにもなかったことを。あれほど時間とお金をかけ、努力をしてきたものを、彼女は迫られるようにして、崩していく。再びノック。キイロは今度こそ落ち着いていられず、舌打ちしてとうとう洗面所を出、足を鳴らしてドアへ向かった。「誰？」

「黒です」

冷徹な答え。キイロはため息をつき、頭を掻きむしった。金色の毛がぱらぱら落ちる。

「帰ってくれる？」

「重要事項なのですが」

「じゃ、そこで言って」

「渡したいものがあるので、どうか開けてもらえませんか？」

キイロは訝しんだ。今までこの黒からは、何も受け取ったことがない。キイロは余計に怪しみ、ドアから少し身を引いた。

「……今、誰にも会いたくないの。郵便受けに入れといてくれる？」キイロはようやく言った。

「入れただけでは、わからないかもしれません。その重要性が」
キイロは苛々した。

「じゃ、説明して。そのあと、それを入れてくれればいいから」
しばらく無音。キイロはドアスコープを覗いた。
誰もいない。

すると、ドアの郵便受けから何かが差し出された。それは、小さな封筒だった。もう一度覗くと、黒が立ち上がったところだった。

「開けてみてください」

キイロは、下に落ちた封筒に触れたくもなかったし、ましてや彼と話したくも

なかった。が、彼は強固な壁のように立ち尽くしているので、キイロは仕方なく封筒を拾い、中を開けた。

中からは、螺子といくつかの金属パーツが出てきた。

「開けましたか？」黒は問う。

「なんなの？ がらくたなんだけど」

「あなたではないかと、お隣の縁が言っていました」

「はあ？ 馬鹿じゃない？ こんなごみ、あたし知らないわよ」

「おや、そうでしたか。……本当に、あなたのもではないんですね？」

「そうよ。なんなの、こんなものよこして。なんのつもり？」

「いいや。こちらのことです。それらは、すべてあなたに差し上げます」

「いらないわよ。捨てるわ」

「その決断は、もう少し待ってから。というより、嵐が来てからの方がいいと思います。捨てるか捨てないかはあなたの自由ですが、それまでは取っておくようにしてください。もしかすれば、誰かを救うことになるかもしれませんので」

キイロは封筒をほっぽり、ドアスコープにへばりついた。黒のことを、その腫れぼったい目でぎらりと睨む。

「あんた、おかしいわ。あんた、いったい何が目的なのよ」

「私は、」

「なんで色々うろついて嗅ぎ回ってんのよ。あたし、知ってんだからね。あんたがお節焼いていろんなどころに顔出してること。ねえ、言いなさいよ。あんた本当に何が目的なの？！」

「……そうですね。うまくいくかどうかわかりませんが、部屋の一新、と言った方がいいでしょうか」

「はあ？」

「もう長い間、あなたたちはここに住んでいます。ですが、部屋というのは他のどんなものとも同様、古くなるものです。古くなれば、新しくしなくてはなりません」

「じゃ、普通にそう言えばいいじゃない」

「普通に言えば、あなた方は何か変わるのでしょうか。私は、見守るのが仕事なんです。あなた方が部屋に入り、出るところ、そこまでを。このことは、お伝えしたことがあると思いますが。……まあ、契約時の話は忘れるもので……」

「知らない。もう二度と来ないで。さよなら」

さつさとドアから離れたキイロは、だが、思い出すことがあって、急いで戻った。

「ねえ、ちよつと、アオはどうなったの？ あんたたち、付き合ってたってじゃない」

「付き合っていた？」

黒はまだそこにいた。彼は、わずかに黙ったあと、顎を上げた。「いいえ、お付き合いなどはしていません。私たちは単に、仕事をしていただけです。私は彼女に、仕事の助手を頼んだのです。今は、もうしていませんが」

「仕事？」

「キイロさん、あなた、どこまでが自分というものであるのか、ご存じですか。幾多にもおよぶ思考。賛成、反対、どっちつかずの意見。あなたもそう、たくさんに抱え込んでいるはずですよ」

キイロは顔を歪ませた。キイロの胸のうちに、名もなきひずみが生まれた。

「私は、それとどう折り合いをつけるか探り、そしてアオもまた、向き合う旅に出たのです。……かつての話ですが、ね」

黒はそう言って、キイロのドアの前から去っていった。

橙夫人は、ごみ出しのために玄関のドアを開けた。しかしそこで、はっと息をのんだ。

「黒さん……」

「お久しぶりです。橙夫人」

橙夫人は、息を詰まらせ、ドアの後ろに隠れたくなった。が、なんとか理性を取り戻して、彼と向かい合った。

「……何の、御用でしょう」

「アオさんの部屋を見にいったってほしいのです。それが終わったら」

黒は、分度器で測ったようなぴっちりとした角度で腕を上げ、ごみ袋を指した。

「ええ？ ……あの、でも、なぜなんです？」

「なぜか？ あなたは、ごみ出しと洗濯と買い物、そして掃除と料理、そして、何かで構成されている。その何かを、知りたくないですか」

「知るも何も、私は今挙げられたこと以外のこともやっておりますよ。例えば、パートの仕事とかね」

「違います。あなたからそれらを取り払ったときの、中身です」

ざわつとして、橙夫人は一步中へ退いた。

「何を言うんですか。……私、……そんなの取り払ったら、なんにもなくなってしまいますよ。私、そんなたいそうな者じゃないので……」

橙夫人はごみ袋を抱え、いったん中へ入ろうとした。閉めようとしたドアを、黒の手が抑えた。

「何もないのが答えですか？ それを埋めるために、いろいろこれから試みようかと？ 例えば手芸、料理教室、資格をとったりだとか？」

「……なんで……」

「もちろんそれは、あなたを見つけるために必要な旅です。ですが、本当にあなたが得たいものは、そこから得ることはできません。今のままでは」

「気味が悪いです。私はそれで十分なんです。他人のことなんだからいいでしょう」

橙夫人は力づくでドアを閉めた。ばたんつと咆哮したドアの向こうで、黒の聲がまだ続く。

「あなたは、人間がどのように成長するか、その目で見てきました。自分と子どもたち。何が同じで、何が違うのか。叱り、抱擁、促し、助け。何が救済となり、何が邪見とされるか」

ドア越しに黒の聲が響く。「人によって、それはそれぞれ違う。あなたは、それを探すことと今まで向き合ってきた。お子さんを通して。だが、まだ残っているのです」

そう言うと、黒はかたい靴の音を響かせて、去っていった。

橙夫人は、一分しつかり待つてから、ドアスコープで外の様子を窺った。ドアがずらりと並んでいる。今はそれしか見えない。

橙夫人は、足元のごみ袋を見下ろした。今じゃ量は減って一つきりだ。以前は、一人で何往復もするくらい大量にあったのに。

彼女は、もう一度ドアスコープを覗き込んだ。

アオの部屋は、ほぼ真向かいにあった。彼女のことはよく知らないが、創作活動をしていると聞いたことがある。

彼女の部屋へ行くべきなのだろうか。橙夫人は、再びごみ袋を見下ろした。

ミスターパープルは、朝からシャワーを浴びていた。久しぶりの休日は、こうしてすっきりとはじめたかった。きちんと整理された棚から、香り高いシャンプーを手のひらにとる。

泡立てた直後に、電話が鳴った。ミスターパープルは呻き、髪を洗うことにいそしんだ。今は仕事の時間ではなく、自分のための時間だ。こんな時間にまで他人にとらせてたまるかと、彼はなかば躍起になっていた。

電話はしばらくすると鳴りやんだが、ミスターパープルが湯船に浸かった瞬間、再び鳴り出した。ミスターパープルは、いつそのこと電源を切ってしまった覚えよかった、と思った。今日は休み。そう、今日は休みであるのだ。なのに、マネージャーは電話を鳴らし続ける。やつめ、他人の人生の妨害もいところだ。ミスターパープルは舌打ちをする。

やがて、ミスターパープルは湯船の中で夢を見た。じつとりと浸かったお湯の中で、彼は、独楽のようにまわるステージに立っていた……………。

ステージの周りには、顔を赤くして歓声を上げる多くのファンたちがいた。ミスターパープルは、笑顔で彼らに手を振った。

ステージの横には、車が止められている。ミスターパープルは手を振りながら、ふらふらと、胴の長い車の中へ乗り込んだ。

「さあ、次のステージはどこだい？」ミスターパープルは襟を正し、運転手に問うた。

しかし、彼はそのとき、ルームミラーに映る自分の顔を見つけた。その顔には、クリップがたくさんくっついていた。クリップは頬骨あたりに留まっついていて、口角を無理やり引き上げている。自分はそれで笑顔を作っていたのだ。

ミスターパープルは絶望した。こんな滑稽な顔を人前で晒したとなれば、もう仕事は来ない！ 彼は悲観的になって泣き叫んだ。

しかし、誰かが肩を叩いてきた。隣に座るマネージャーだった。マネージャーは、横になびく前髪を掻き上げて言った。「そんなことはない。あれはいい演技だったぞ！」彼は、なんてことないさと笑って頷く。

しかし、ミスターパープルはそれどころではなかった。「何を言ってる！ 顔にクリップだぞ！ 顔にクリップだぞ！」

「次は、海辺の町、わいわいオーシャンシティですよ」運転手が朗らかに言う。ミスターパープルは慌てた。まだ顔にクリップが付いている。自分はずっと不自然な笑みを浮かべたまま、ルームミラー越しにこちらを見つめている。顔は鉛色に変色していた。

「大丈夫。ファンデーションをつけよう」

マネージャーが指を鳴らす。すると、後ろから化粧部隊がやってきて、ミスターパープルを取り囲んだ。「楽しくない。楽しくない？」否定と疑問を、彼らは同時にぶつけてくる。

「いいや、楽しいき。お願いだから間に合うようにしてくれよ」ミスターパープルは粉にせき込みながら、迫ってくる手たちを払い続けた。

「あら、あなた。そんなに指図しておいて。私たちのことが嫌いなのか？」パフを彼の頬に押しつけながら、化粧部隊の一人が言う。

「違う、そうじゃない」

「ほら、歌って」運転手がマイクを差し出す。

「何言ってる。私は歌手じゃないんだぞ。俳優だ！」

「俳優も歌っていいのさ。そうじゃなきゃ、このご時世やっていけないよ」

マネージャーはウィンクし、ミスターパープルは愕然とした。「私は音痴なん

だ！」どこかで、電話の鳴る音がしている。マネージャーのポケットからだ。

「ああ、わかってる。今行くよ。準備は整った。……さあ、吊り上げて！」

マネージャーは、頭上に向かって指をさす。

次の瞬間、ミスターパープルの体は、ワイヤーで吊られて宙に浮いていた。突然のことに、ミスターパープルは声も出なかった。

足元に、芥子粒ほどになった観客たちがうごめいている。彼らは、吊り上げられたミスターパープルに向かって指をさし、なにやら呟いていた。マネージャーも化粧部隊も運転手も、同じようにミスターパープルを見つめ、何か囁いている。再び電話が鳴った。またマネージャーのものだ。眼下にいる粒のマネージャーは、電話をとった。

しかし、コールは止まない。ずっとずっと鳴り響く。ミスターパープルは、あまりの騒音に悲鳴を上げた。するとそこで、眼下に一人の男が立っているのが見えた。紫色のスーツ。彼はじつとミスターパープルのことを見つめている。他の観客と違い、無感情な瞳で。

彼は言う。「上手に踊れてるか？ 上手に踊れてるか？」

コールの音が、最大に達する。まるで、誰かがドアを叩いているかのように、繰り返し、繰り返し。

それは、やがて風の音も孕んできた。どうどう、どうどうと。繰り返し。繰り返し。

キャンバスに色をぶちまけていたアオは、ふとしてその手を止めた。顔を上げ、

耳を澄ます。

なにやら風の音がする。風は、中に人がいるのか確認するかのように、その手で窓を叩いてゆく。そして、そそっかしくドアの方へと回りこみ、今度はそちらを揺らすのだ。

アオは身を硬くした。パレットを置き、一、二歩、ドアの方へと歩いてゆく。

彼女は仁王立ちすると、ドアを睨みつけた。

風は何かを語る。低い声で。あちらからも、こちらからも。怪しい叫び。雲を運び、外を、中を、薄闇に染める。風は、他のものも運んでくる。匂い、砂、季節、気持ち、さらには、遠くにいたはずの忘れられた者たちも。

アオは唸り、居間や寝室から、クッション、ぬいぐるみ、枕などをとってきて、ドアの前に積み上げはじめた。ドアはがたがたと抗議する。風はどこからか吹き込み、アオのことを不安にさせる。

彼女は、音と風を防ぐため、積んだクッションの隙間に、またクッションを突っ込んだ。

「平気よ。大丈夫。もし来たとしても、ここへは入って来られないわ」

アオはそう言いながら、冷や汗を流す。部屋はゆっくりと濃紺色へ染まってゆく。満潮であるかのように、ひたひたと、それは確実にアオの部屋を覆いはじめる。アオは、それを抑えるがごとく、クッションの壁をどんどん高く作り上げていった。

と、そのとき、こんこんとドアが叩かれたので、アオはクッションを抱いたまま飛びのいた。

彼女はしばし、無言でドアを見つめた。心臓が早鐘を打つ。もしかすると、もうやって来てしまったのかもしれない。口の中が乾ききってしまう。またあいつなんか会いたくない。やっとこの部屋を手に入れられたというのに……。

数秒後、ドアの向こうから声がした。

「あの……、もしもしアオさん？ いらっしやらないの？」

その声は、橙夫人のものだった。

しかし、アオは何も答えることができなかった。口も、瞼でさえも動かず、ただそこで静止したままだった。

「アオさん、いる？ あのう……、ここに来るように、黒さんに言われたのだけだ」

それを聞いた途端、アオの胸の内に亀裂が走り、焼けるような痛みが全身を貫いた。過去への波が、一気に押し寄せてくる。

彼女は耐えきれず、ずううつと床にうずくまった。アオは、その内側にクッションを抱いたまま、石のように沈黙した。世界が、彼女の元から消え去った。

「アオさん？ アオさん？」

ドアの前にいた橙夫人は、何度か声をかけたが、反応がないため、困惑の表情を浮かべた。

橙夫人は、何かするべきかと思っただが、どうにも浮かばず、ついにその場を離れて、自分の部屋へ戻ってしまった。

アオの方かというと、彼女は一人で、過去の沼の底までどんどんどんどん落下していった。

もうその動きは、誰にも止められない。

彼女は攫われ、閉じ込められた。過去による、うねりの中に。